

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02501

研究課題名(和文) 多言語併存状況下における台湾語の現状と変容

研究課題名(英文) The Present Circumstances and Changes of Taiwanese Language under the Multilingual Society

研究代表者

中澤 信幸 (NAKAZAWA, Nobuyuki)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30413842

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)： 東方孝義編『台日新辞書』(1931年刊)の見出し語項目を電子データ化し、見出し語を『台日大辞典』(1931～32年刊)等と対照することで、日本統治期の語彙体系をあきらかにした。これをもとに、日本統治期の台湾語語彙リストを作成し、それが現代の台湾で実際にどの程度通じるのか調査することで、日本統治期の台湾語の残存状況をあきらかにした。

これと並行して、各世代の台湾語母語話者を対象にしたアンケート・インタビューを通して、現代の台湾における台湾語に関する政治的・社会的な状況をあきらかにした。また中華民国による言語政策の状況と、それが台湾語に及ぼす影響についてもあきらかにした。

研究成果の概要(英文)： We made the database of words of “Tai-Nichi Shin Jisyo”, the Taiwanese-Japanese New Dictionary, edited by Takayoshi Higashikata published in 1931. And we compared with “Tai-Nichi Dai Jiten”, the Taiwanese-Japanese Great Dictionary, published in 1931-32. As a result, we revealed the lexical system of Taiwanese language under Japanese rule. We made the list of Taiwanese words under Japanese rule, and then researched how many words does be used in today's Taiwan.

And we researched the political and social circumstances of Taiwanese language in today's Taiwan by questionnaire and interviews. Besides, we researched the influence of the linguistic policy by Taiwan R.O.C.

研究分野：人文学

キーワード：台湾 台湾語 多言語社会 言語政策 台日新辞書 データベース

## 1. 研究開始当初の背景

台湾語(閩南語、河佬語)の研究は、日本統治期(1895~1945)の台湾語辞書の編纂を通して大いに進展した。台湾総督府の小川尚義を中心に編纂された『日台大辞典』(1907)、『台日大辞典』(1931~32)はその代表作である。一方、台湾勤務の警察官だった東方孝義により、『台日新辞書』(1931)も編纂された。中華民国期(1945~)になると、中国語(北京語)の強制により台湾語等は抑圧されたが、日本に亡命した王育徳により研究は続けられた。台湾でも例えば洪惟仁(1985)『台湾河佬語声調研究』(自立晩報社)等があったが、1990年代に入って民主化が進むと、台湾語の研究も盛んに行われるようになる。1991年には「台湾語文学会」が設立され、機関誌『台湾語文研究』(2003年創刊)は現在に至るまで発刊され続けている。また国立成功大学台湾語文測驗中心からは、『台語研究』(2009年創刊)も発刊されている。このように台湾語に関する研究は盛んに行われていたものの、音声や言語表現などの共時的な研究が中心であり、日本統治期からの通時的な変容に関する研究は、充分には行われていなかった。また、日本統治期に台湾語研究に従事した、日本人(日本語母語話者)の「台湾語観」についての考察も、充分には行われていなかった。台湾語辞書についても、『日台大辞典』は中央研究院によって電子データ化が行われているが、『台日新辞書』はその検証はほとんどなされていなかった。

中華民国期に入ってから、台湾人たちの母語である台湾語・客家語・原住民諸語は抑圧されたものの、その後1990年代には言語政策の見直しが進み、学校教育における「郷土教育」でこれらの母語の教育も行われるようになった。台湾語の社会言語学的な研究については、例えば松尾慎(2006)『台湾における言語選択と言語意識の実態』(群學出版有限公司)、陳麗君(2011)「台湾大學生的語言意識」(『台語研究』3-2)等が挙げられるものの、言語政策の影響による台湾語の現状と変容に関する研究は、やはり充分には行われていないのが実情であった。

研究代表者は日本漢字音と台湾語音との対照研究に従事し、特に平成23~25年度の科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)により、研究分担者の岩城、是澤とともに「日台基本漢字」発音対照表データベースを完成させた。その成果はwebおよび論文で公開している。

([http://www.7b.biglobe.ne.jp/~nob\\_nakazawa/](http://www.7b.biglobe.ne.jp/~nob_nakazawa/))これは日本統治期の『日台大辞典』付載「日台字音便覧」をもとに、日本漢字音と台湾語音との発音対照表を構築し、それを台湾の日本語教育で活用することを企図したものであった。

この発音対照表であるが、実際に台湾の日本語教育の現場で活用するに当たって、次の

ような問題に直面した。台湾語の通時的変容の問題 日本統治期の台湾語と現代の台湾語との違いが十分に検証されていない。現代台湾における台湾語の社会状況の問題 台湾社会において台湾語の使用がどの程度許容されるかが明確になっていない。の解決には日本統治期の台湾語と現代の台湾語との対照が必要であり、また当時の日本人の「台湾語観」の検証も必要である。の解決には現代台湾の社会状況の検証が必要である。そこで本研究を着想するに至った。

## 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では次のような目的を設定した。

『台日新辞書』の見出し語項目を電子データ化し、見出し語を『日台大辞典』等と対照することで、日本統治期の語彙体系を明らかにする。あわせて当時の日本人の「台湾語観」についても明らかにする。

上記をもとに、日本統治期の台湾語語彙リストを作成する。それが現代の台湾で実際にどの程度通じるのか調査することで、日本統治期の台湾語の残存状況を明らかにする。あわせて台湾語に対する言語イメージ、及び使用における意識も明らかにする。

上記と並行して、各世代の台湾語母語話者を対象にしたアンケート・インタビューを通して、現代の台湾における台湾語に関する政治的・社会的な状況を明らかにする。また中華民国による言語政策の状況と、それが台湾語に及ぼす影響についても明らかにする。

## 3. 研究の方法

所期の研究目的を達成するために、本研究では研究分担者4名、研究協力者2名の体制を組むことにした。岩城はフィールドワークによる医療現場での方言と共通語の併存によるコミュニケーション上の問題を研究しており、台湾での多言語併存の分析を行うことができる。是澤は『日本書紀』などの古写本の文献研究を専門とする一方、応募者とともにかつて台湾の大学で日本語教育を実践した実績を持つ。この両名は研究代表者の先の科学研究費による研究(現代版「日台字音便覧」データベースの整備と「日台基本漢字」発音対照表の構築)にも分担者として参画していた。新たに分担者に加えた加藤は、漢語アクセント史の資料研究で成果を挙げてきた一方、台湾を対象とした社会言語学的考察、特にダイグロシアに関する考察も行っている。本研究では台湾語辞書の電子データ化を担当した。酒井は台湾語に堪能であり、台湾語学に関する学術誌『台語研究』の編集委員も務めている。これまで台湾における文化・社会・政治などのさまざまな面について、多くの著書・論文を公表してきた。本研究では台湾の政治面、社会面に関する調査を担当し

た。一方、台湾側の研究協力者として、研究代表者の先の科学研究費による研究でも協力者となっていた蔣・陳を、引き続き研究協力者として加えた。蔣は学術誌『台語研究』の主編を務める等、台湾で台湾語研究をリードする一人である。陳は台湾語に関する社会言語学的な論考を発表する一方、日本語教育への応用についても研究している。

上記の研究メンバーのもと、以下のような行程で研究を進めることにした。

#### ・平成 27 年度

『台日新辞書』(全 987 頁)の、見出し語となっている台湾語(片仮名)及び日本語訳を Microsoft Excel に入力することで、電子データ化する。これは中澤と加藤が担当し、データ入力はアルバイトに依頼する。

上記で作成した電子データをもとに、見出し語を『台日大辞典』等と対照しながら体系的に検証することで、日本統治期の台湾語の語彙体系について分析する。当時の日本人の「台湾語観」についても分析する。これは中澤と是澤が担当し、台湾語学の面から蔣・陳の助言を仰ぐ。

上記の考察をもとに、上記の電子データから生活基礎語彙・教養語彙(200 語程度)を抽出し、実際に調査で用いる日本統治期の台湾語語彙リストを作成する。これは是澤と岩城が担当する。

上記～と並行して、各世代の台湾語母語話者を対象にアンケート・インタビューを行い、台湾における台湾語に関する政治的・社会的な状況について調査する。また、中華民国による言語政策の変容が及ぼした影響についても調査する。これは中澤と酒井が担当し、インフォーマントの選定については蔣・陳の協力を仰ぐ。

#### ・平成 28 年度

前年度で作成した『台日新辞書』の電子データについて、片仮名で記された台湾語をローマ字(台羅、白話字)に変換する等の整備を行う。その上で画像付きデータベースとして web で公開する。これは中澤と加藤が担当し、データ入力はアルバイトに依頼する。また台湾語学の面から蔣・陳の助言を仰ぐ。

前年度に引き続いて調査を継続し、日本統治期の台湾語の語彙体系と当時の日本人の「台湾語観」を明らかにしていく。これは中澤と是澤が担当し、台湾語学の面から蔣・陳の助言を仰ぐ。

前年度で作成した日本統治期の台湾語語彙リストを調査項目とし、それが現代の各世代の台湾語母語話者に、実際にどの程度通じるのか調査する。具体的には、各項目についてインフォーマントに「1 使う」「2 知っているが使わない」「3 使わない」の 3 段階で回答してもらう。これによって、日本統治期の台湾語の残存状況を調査する。あわせて台湾語に対する言語イメージ、及び使用における

意識も調査する。これによって、コードスイッチングのメカニズム解明につなげる。これは中澤と岩城が担当し、インフォーマントの選定については蔣・陳の協力を仰ぐ。また前年度の考察結果も適宜考慮に入れていく。

前年度に引き続いて、各世代の台湾語母語話者を対象にアンケート・インタビューを行い、台湾における台湾語に関する政治的・社会的な状況、また中華民国による言語政策の変容が及ぼした影響について明らかにしていく。これは中澤と酒井が担当し、インフォーマントの選定については蔣・陳の協力を仰ぐ。またの調査結果も適宜考慮に入れていく。

#### ・平成 29 年度

前年度に引き続いて、日本統治期の台湾語語彙が、現代の台湾語母語話者にどの程度通じるのか調査する。これによって、日本統治期の台湾語の残存状況を明らかにしていく。これは中澤と岩城が担当し、インフォーマントの選定については蔣・陳の協力を仰ぐ。

上記の結果を前年度の考察と照らし合わせることで、多言語併存状況下における台湾語の現状と変容を解明していく。これは中澤ほか全員で行い、蔣・陳の助言を仰ぐ。

上記の考察結果を日本及び台湾の学会等で発表し、論文として公表する。また考察結果は各種データとともに web ページで公開する。

## 4. 研究成果

#### ・平成 27 年度

日本統治期の台湾で警察官だった東方孝義により編纂された、『台日新辞書』(1931)の電子データ化を行った。具体的には、『台日新辞書』全 987 頁の見出し語となっている台湾語(片仮名)を、Microsoft Excel に入力することで、データベースを作成した。データ入力はアルバイトに依頼した。この電子データをもとに、見出し語をやはり日本統治期に編纂された『台日大辞典』(1931~32)等と対照しながら、体系的に検証することで、日本統治期の台湾語の語彙体系について分析した。加えて、日本統治期の日本人による「台湾語観」についても、分析した。

この考察をもとに、電子データから生活基礎語彙・教養語彙(200 語程度)を抽出し、次年度に台湾語インフォーマントを対象にした調査で実際に用いる、日本統治期の台湾語語彙リストを作成した。

上記に加えて、台湾に赴いて台湾の言語政策に関わる民進党の立法委員、大学教員等にインタビューを行った。具体的には、これまでの中華民国の言語政策、政権交代(国民党から民進党)後の言語政策の見通しについて話を聞いた。その結果、台湾の多言語化とその保護が、今後は政策レベルでさらに推進されるという見通しを得た。

・平成 28 年度

前年度は、日本統治期に編纂された台湾語辞書『台日新辞書』(1931)の見出し語(片仮名)を、Microsoft Excel に入力することで電子データ化を進めたが、本年度はさらに漢字項目も入力するなどして内容を充実させた。また『台日大辞典』(1931~32)等とも対照しながら、その語彙特徴を体系的に検証した。

そしてこの電子データから、台湾語語彙を 100 語程度ランダムサンプリングすることで、現代の台湾人を対象にした調査を行うための語彙リストを作成した。これをもとに、台湾在住の台湾語インフォーマント 4 名(80 歳代 3 名、70 歳代 1 名)を対象に、実際にアンケート調査を実施した。その結果、『台日新辞書』の語彙は日常生活に即したものと別には、編纂者東方孝義によって入れられたと思われる、特殊なものも含まれることが明らかになってきた。

これに加え、これまでのデータベース作成、および台湾の言語政策関係者からのインタビュー調査で得られた成果について、イタリア・ヴェネツィアで行われた欧州台湾学会において英語で発表した。

・平成 29 年度

前年度は、日本統治期に編纂された台湾語辞書『台日新辞書』(1931)のデータベースに、漢字項目も入力するなどして内容を充実させた。本年度は、この『台日新辞書』の内容を『言海』(1889~91)、『日台新辞典』(1904)や『台日大辞典』(1931~32)と対照しながら、その語彙特徴を体系的に検証した。

また前年度は『台日新辞書』データベースから、台湾語語彙を 100 種(133 語)ランダムサンプリングすることで、現代の台湾人を対象にした調査を行うための語彙リストを作成した。これをもとに、台湾在住の台湾語インフォーマント 4 名(80 歳代 3 名、70 歳代 1 名)を対象に、実際にアンケート調査を実施した。

以上の成果について、本年度は天理台湾学会(7 月)および日本語学会(11 月)で研究発表を行った。

また、本年度は台南市在住の 5 名、台北市在住の 2 名(いずれも 50 歳代)を対象に、前年度と同様のアンケート調査を実施した。その結果、80 歳代の人たちとは台湾語の残存状況が異なることを確認した。この調査をもとに、前年度の調査と合わせて、分析した結果を学会で発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

中澤信幸(2017)「台湾語母語話者と日本漢字音」、『天理臺灣學報』26(天理台湾学会) pp. 93-112

中澤信幸(2016)「台湾人日本語学習者と台湾語音 母語意識・居住地域等との相関から」、『天理臺灣學報』25(天理台湾学会) pp.121-139

中澤信幸(2015)「日本語教育における台湾語音活用と「日台基本漢字」」、『台湾文學研究』8(台湾・国立成功大學台湾文學系) pp.11-41

[学会発表](計 6 件)

中澤信幸・岩城裕之・加藤大鶴・是澤範三・酒井亨「東方孝義『台日新辞書』の語彙に見られる日本語」、『日本語学会 2017 年度秋季大会、2017 年 11 月 12 日、金沢大学角間キャンパス

中澤信幸・岩城裕之「東方孝義編『台日新辞書』所収語彙の特徴」、『天理台湾学会第 27 回研究大会、2017 年 7 月 1 日、天理大学

SAKAI Tohru, NAKAZAWA Nobuyuki, Database of Holo-Taiwanese Language in the Process of Making Multi-Linguistic Policies, The 14th Annual Conference of European Association of Taiwan Studies, March 2-4, 2017, Ca' Foscari University of Venice

中澤信幸「台湾語母語話者と日本漢字音」、『天理台湾学会第 26 回研究大会、2016 年 7 月 2 日、天理大学

酒井亨「台湾ホーロー語運動の制度に対するインパクトおよび限界」、『日本台湾学会第 18 回学術大会、2016 年 5 月 21 日、宇都宮大学峰キャンパス

中澤信幸「台湾人日本語学習者と台湾語音 母語意識・居住地域等との相関から」、『天理台湾学会第 25 回記念研究大会研究発表、2015 年 6 月 28 日、天理大学

[その他]

ホームページ

Nobuyuki NAKAZAWA Website

[http://www.7b.biglobe.ne.jp/~nob\\_nakazawa/](http://www.7b.biglobe.ne.jp/~nob_nakazawa/)

データベース等の研究成果を、この web ページにて公開している。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中澤 信幸 (NAKAZAWA, Nobuyuki)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30413842

(2) 研究分担者

岩城 裕之 (IWAKI, Hiroyuki)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授

研究者番号：80390441

加藤 大鶴 (KATO, Daikaku)  
東北文教大学短期大学部・総合文化学科・  
准教授  
研究者番号：20318728

是澤 範三 (KORESAWA, Norimitsu)  
京都精華大学・人文学部・准教授  
研究者番号：20554075

酒井 亨 (SAKAI, Tohru)  
金沢学院大学・基礎教育機構・准教授  
研究者番号：90645350

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

蔣 為文 (Chiung, Wi-vun)  
台湾・国立成功大学・文学院・教授

陳 麗君 (Tan, Le-kun)  
台湾・国立成功大学・文学院・副教授